関西大学『社会学部紀要』第32巻第1号，2000，pp.179－204　　ISSN 0287－6817

研究ノート

社会学を考える――社会学の再生を求めて――

片　桐　新　自

Thinking Sociology: For Regeneration of Sociology

Shinji KATAGIRI

Abstract

Sociology had been orientated toward systematic study based on Parsons' "structural-functionalism" untill the 1950's. However, many critical theories against Parsons have appeared since 1960's. Sociology has consequently lost the main stream. Although at the present time many young students are interested in sociology, the sociology that most of them expect is very different from what sociology should be. Popularizing sociology as they expect become big crisis for the future of sociology. Now we sociologists must consider deeply what is sociology and what sociology can do.

Key words: macro perspective, functionalism, quantitative analysis, policy science, objectivity, Wertfreiheit(value-free), Bindestrich-Soziologie (hyphen-sociology), total society, sociological imagination, feeling-oriented approach, micro sociology, sociological value relativism, concept, scholarly study

抄　録

1950年代にパーソンズらの「構造―機能主義」を核に，体系的な学問への道を歩んでいた社会学は，1960年代以降それに対する様々な批判理論が登場する中で，メイン・ストリームを失った学問になってしまった。現在，漠然とした「社会学人気」は若い人たちにあるようだが，そこで期待されている社会学は本来の社会学のあるべき姿からかなりかけ離れているような気がしてならない。こうした形で社会学が広まっていくのは，実は社会学にとって大いなる危機だという認識が私にはある。21世紀を直前に控えた今，社会学とはどのような学問で，どのようなことをなしうるのかをきちんと考える必要がある。

キーワード：マクロな視野，機能主義，計量分析，政策科学，客観性，価値自由，連字符社会学，全体社会，社会学的想像力，実感主義，ミクロ社会学，社会学的価値相対主義，概念，学問

＜目次＞

はじめに
第1章　社会学の実践性
第2章　政策科学としての社会学
第3章　社会学における客観的認識
第4章　連字符社会学の発展と社会学の危機
第5章　全体社会の範囲
第6章　社会学の研究対象とその発見
第7章　社会学的想像力の必要性
第8章　社会はどのように成立したのか――歴史的考察――
第9章　実感主義とミクロ社会学
第10章　社会学的価値相対主義の潜在的逆機能
第11章　概念へのこだわり
第12章　学問研究は何のためにするのだろう？
おわりに

はじめに

本稿は，もともとホームページ（http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~katagiri/socio/）上で公開するために書かれた文章である。各章はそれぞれ独立しており，どこから読んでもらっても構わない。ただ，全体として，現在の社会学の状況に対する強い危機感が私にはあることはわかってもらえると思う。社会学という魅力的な学問がこのままでは共通の基盤も持たない正体不明の学問になってしまいそうだという不安感がある。そして，その社会学の危機的状況は，現在の社会のあり方と相互に影響しあっているように思えてならない。社会学をどのように捉えたらいいのか，そしてどのような社会的貢献が可能なのかについて，きちんと考えてみたいという思いから，これらの文章を書いてみた。様々な意見が寄せられることを期待している。

第１章　社会学の実践性

最近ある社会学者の書いた文章を読んでいて，軽いショックを受けました。そこにはこんなことが書いてありました。「実践的意味合いをもった質問に上手く答えられなかったときや，相手にほとんど発言の真意が伝わらなかったとき，『私の専門は社会学だから……』と呟く。」えっ，それってどういうこと？社会学はどうせ役に立たない学問だからしょうがないって，自分で自分をなぐさめるってことでしょうか？１人前の社会学者がそんなことを言うなんて，それはないんじゃないのというのが正直な感想でした。別にこの人を個人的に批判したいわけではありません。確かにこうした自嘲的な言説は社会学に関してはよくなされており，どこかでそれを聞きかじった学生たちもしばしば「先生，社会学って何の役に立つんですか？？」と「どうせ役に立ちませんよね」といった気持ちを顔にありありと出して質問をしてくることがあります。冗談じゃないと憤りたくなります。もっと社会学という学問の良さを語っていかなければならないと思います。

もちろん社会学は万能の学問ではありませんので，苦手なことはいろいろあります。今回の文章を書かれた方は，現在は社会福祉を看板にしているそうなので，実践的意味合いというと，たぶん個々の家庭や個人などのケースにおいてアドバイスを求められたりした際のことを念頭において書かれたのではないかと思います。確かに，そういうケースワークにおいて，社会学の理論はそんなに有効な回答を示してはくれないでしょう。なぜなら，社会学は個人の問題を解決するために生み出された学問ではないからです。精神分析学や臨床心理学とは視野の範囲が全く異なります。個人の悩みに理論的に答えてあげたいと思うなら，社会学ではなく，精神分析学や臨床心理学を学ぶべきです。自分の今なすべき課題がそこにあるなら，もはや社会学に拘泥せずに，自由に他の学問の成果を利用すべきです。相手を納得させられないことを社会学のせいにしてはいけないと思います。（ただし，私は精神分析学や臨床心理学の理論というのが，どれほどすばらしいのかは知りません。正直言うと，たいしたことはないだろうと思っています。にもかかわらず，精神分析医や臨床心理学者が個人の問題に多少なりともアドバイスをなしうるのは，他の人よりケースを多く知っているからだと思います。新米の医者に手術してもらいたくないのと同じ意味で，新米の臨床心理学者などにもカウンセリングはしてほしくないと思いませんか？）

話がちょっと横道にそれました。戻しましょう。では，個人の問題を解決できない社会

学は結局実践的な意味を持ち得ないのでしょうか？いえ，そんなことはありません。「実践」という言葉を個々の人々が考えると，どうしても個人的問題の解決ということが念頭に置かれやすいですが，もっと広い視野で捉えることもできるはずです。社会的問題を解決するためには，社会学は大きな寄与をすることができるはずです。例えば，「少子化」という社会にとっては死に至る病とも言うべき問題に対策を打とうとする時，社会学の知見はおおいに役に立つはずです。社会学的思考をすれば，女性の高学歴化，婚姻制度の実質的不平等と硬直化，家庭と仕事の両立の困難さ，子育てを社会的に支援する体制の欠如，性意識をはじめとする価値観の変化といった社会的要因がすぐに浮かび上がってきます。どんな社会的問題に対しても社会学はそれなりの分析をし，それなりのアドバイスをすることができます。こんなに実践的なことのできる学問なのに，なぜそう思われていないのでしょうか？その最大の原因は，社会学にではなく，社会的問題の方にあるのです。というのは，何が社会的問題であるかということに関しては，イデオロギーが絡んできてしまうからです。ある立場の人から見れば大問題だと思えることでも，別の立場の人から見れば全く問題はないなんてことはしばしば起こります。というより，すべての社会的問題は，そういうものだとも言えます。「少子化」などは，かなり多くの人が「社会的問題」と認知しうるものですが，近代的国民国家をベースにした世界社会は不安定になりやすいので，その解体が進むことは地球の未来にとって望ましいと考える人なら，日本の「少子化」は全く問題とは思わないでしょう。（個人的問題も厳密に言うと，こうしたイデオロギー問題はあるのですが，最終的には，その精神と肉体の所有者が問題だと自分で判断すれば，個人的問題は成立するわけです。）

このように「何が社会的問題なのか」が明確にならないうちは，社会学も出て行けないのです。患者の来ない医者が街へ出ていって，「あんたは病気だから，うちに診察に来なさい」と言っても，ほとんど誰も行かないでしょうし，彼のことを名医とは呼ばないでしょう。それと同じで，社会学が勝手に「これが社会的問題で，対策はこうだ」などとやっても，誰も本気で聞いてはくれないでしょう。社会学は社会の名医になりうるのに，真剣に診察に来てくれる人がいなければ，その優秀さを証明することができません。社会を人間に見立てれば，社会として思考し判断する頭脳の役割を果たすのは，政治でしょうが，日本の政治担当者たちは相も変わらずお腹を膨らませることばかりに熱心で，経済学者にはよく相談に行きますが，社会学者にはあまり相談に来ません。しかし，現在の日本社会の病は，ひもじさから来ているのではなく，むしろ肥満になりすぎ，それに慣れてしまっ

た怠惰な精神から来ているように思います。その意味では，経済学者の病院に相談に行くより社会学者の病院に相談に来るべきでしょう。ただし，社会学の与える薬は，個人が期待するような即効性はありません。というより，社会は個人とは段違いの長期的サイクルで動いていますので，10年，20年を単位として考えていかなければならないのです。人間の医者はよく４日分くらい薬をくれますが，社会学が社会に与える薬は，40年分ぐらいだと思ってもらうとちょうどよいのだと思います。人間の病なら４～５日で快復したかどうか判断がつくわけですが，社会の場合は最低でも40～50年は見てもらわないと薬が効いたかどうかわからないのです。こうした社会学の特徴を考慮せずに，１～２年で結果が出ないからといって，社会学は役に立たないだの，実践性が欠けているなどというのは，社会学に対する不当な批判でしょう。

さて，では社会学の方には何の問題点もないのでしょうか？残念ながら，現在の社会学の状況を見る限りそうは言えないでしょう。もしも同じ病気で診断を受けに行っても，診察してくれる社会学が異なると全く見立てが異なり，処方も異なるということが十分起こりえます。人間の病気でもこうしたことは起こりえますが，一応複雑な病気でなければ，大体どの医者も同じような診断をしてくれるはずだという信頼感を一般の人は持っています。（私は，個人的には，医者の見立てだって結構怪しいものだと思っていますが……。）社会学はこんな信頼感を持ってもらっていません。これにはいろいろな原因が考えられますが，やはりディシプリンが確立していないということが大きいと思います。医者になるには国家試験があり，一定の知識と技術を身につけていることを国家が保証してくれています。これに対して，社会学者になるにはほとんど共通した知識や技術を要求されません。（だから，社会学者でもない人が安易に「○○の社会学」とか名づけた本を出せてしまうのです。）それどころか，新たに社会学の世界に割って入ろうとする人は，過去の蓄積を批判する方がより効果的だとでも思っているかのように，従来社会学が積み上げてきた成果を批判することばかりに熱心です。曰く，計量的調査なんてだめだ，機能主義なんてだめだ，あれもだめ，これもだめで，自分が見つけたものだけが価値があるといった感じです。一見新しく見える概念も実はすでに言われていることがほとんどで，単に言い換えただけに過ぎないということが多いと思います。下手に理論的にやってそんなことは以前から言われていると批判されたくない人は，とにもかくにも他人が手をつけていない自分だけのフィールドとやらを見つけて，それだけを近視眼的に研究し，オリジナリティを誇るという道に逃げ込むことになります。現在，大学院が拡充され，社会学の道に入ってくる

若い人がどんどん増えていますが，こういう人たちが社会学の基礎をきちんと身につけずに，ひたすら自分を売り出せる「新しいもの探し」に明け暮れているなら，社会学の将来は暗いでしょう。

社会学も本来はディシプリンを確立しえたはずなのです。1960年頃まではその方向に確実に進んできたのですが，1960年代以降の文化と価値観の大きな揺らぎが社会学のディシプリン確立への志向性を雲散霧消させてしまいました。もちろん，それ以前のディシプリン確立の方向性には問題点もありましたから，ある種の批判は建設的なものとして受け止められるものもありました。しかし，一度始まった既成の権威に対する反乱は，受け入れられるとなったら，留まるところを知らずに進んでいきました。混乱の60､70年代を経て，80年代には，社会学はメイン・ストリームのない奇妙な学問になってしまいました。21世紀を前にして，社会学の再生を果たされなければならないという思いが私には強くあります。再生のためには，もう一度ディシプリンを確立させる方向へハンドルを切るべきだと思います。ディシプリン確立のための核になるのは，「マクロな視野」，「機能主義」，「計量分析」なのではないかと思っています。

第2章　政策科学としての社会学

「政策科学」とは何でしょうか。「政策を研究する科学」という解釈の仕方もありうるかもしれませんが，一般的には，「政策提言をなしうる科学」という意味で使われているだろうと思います。では次に，後者の意味で「社会学は政策科学たりうるか」という問いかけをしてみましょう。答えはもちろん「ＹＥＳ」です。しかし，問いを変えて，「社会学は政策科学たりえてきたか」と問えば，答えはそう単純に「ＹＥＳ」にはならないように思います。

確かに社会学は，いろいろな形で実践に関わってきました。ある社会学者は住民の立場に立つことによって，ある社会学者は行政の審議会の委員として，多くの実践的提言をなしてきたと言えます。にもかかわらず，「社会学は政策科学か」と問われると，素直に「ＹＥＳ」と言えないのは，どこに問題があるのでしょうか？それは，一言で言ってしまえば，社会学に科学であろうとする姿勢や意欲が十分でなかったことにあるように思います。ですから，実践的提言がなされていても，それはある価値観・イデオロギーからの主張と見なされ，科学的な政策提言としては受け止められなかったのです。

こういう言い方をすると，当然おまえは科学の中立性・客観性を自明視しているという

批判の矢が飛んでくると思います。しかし，それは全くの誤解です。科学が完全に価値観から中立でありえようはずはありません。なぜなら，どのテーマを研究するかという選択からして価値に関与しているからです。研究者が自分の価値観に照らして重要だと思うものを選択しているわけですから，すでに価値に関与しています。しかしだからといって，「どうせ価値中立的に研究を進めることなどできないのだから，ある立場を選択してその立場からのみ見えることを語ろう」と開き直ってはいけないと思います。ここが重要なポイントです。確かに意識的，無意識的に，研究者は価値を選択している，しかしだからといって，自分の価値観に拘泥しすぎてはいけないのです。

なぜいけないかといえば，特定の価値に拘泥しすぎると，それとは異なる価値観を持つ人々の意見，考え方を受け入れられなくなってしまうからです。（研究者ではありませんが，自分の価値観に過度の自信をもった政治的指導者が，社会を混乱と疲弊に至らせた例は数多くあることを思い出して下さい。）様々な価値観を持つ人々がその立場から思考し行動し，それが絡み合って，社会的事象は生じています。なるべくそれぞれの人々の行動の規範となった土俵（価値観）の上に立って考えるように努力しないと，彼らの行動の意図，リアクションに対するさらなるリアクションなどを正確に解釈することができず，ひいては社会的事象を正確に把握することが困難になります。その意味で，「科学的」たらんとするならば，できるかぎり「価値自由」（「価値への自由」でもあり，「価値からの自由」でもある）的でなければならないと言えます。

もうひとつ社会学が「科学的」であるためになされなければならないことは，因果連関を把握することです。「なぜなのか？」という問いに答えを出すために，科学的研究は行われなければなりません。こういう事実があったという記述だけに留まっていては，科学たりえません。「なぜそんな社会的事象が生じたのか」という社会的原因をしっかり把握することが必要です。そして，この作業を進める上で，データに基づいて語るという原則が守らなければなりません。豊富なデータを集め，そこから帰納法的に法則性を見いだし（＝仮説を形成し），その仮説を演繹法的に検証し，しっくりいかなければ仮説を微調整してまた検証し，ということを繰り返して，最終的には適用力の高い法則にしていくという作業がなされなければなりません。

こうしたスタンスと作業を通じて社会的事象の因果連関に関する法則が提示できれば，その法則を使って政策提言は容易になせるようになるはずです。（もちろん，政策提言をするためには，価値観が改めて意識的に選択されなければなりません。また，政策の実行

が容易かどうかはまた別の問題です。）学問も「象牙の塔」にこもって自己満足しているだけではだめです。役に立つ学問になるために，社会学は上で述べたような意味での「政策科学」として認められていかなければならないと思います。

第3章　社会学における客観的認識

社会学で客観的な認識が可能かと問われれば，不可能だと答える人が多いのではないかと思います。確かに「客観的」という言葉を「一切の恣意を排除した」という意味で使うなら，社会現象に対する客観的な認識は不可能でしょう。認識対象を他から完全に隔離することはできないこと，認識主体が自分の価値観から完全に自由になれないことなどから，完全な形での客観的認識は不可能です。このため，客観的な把握を最初からあきらめ，主観主義に流れる傾向も見られます。曰く，「質問紙調査の客観性は疑わしい」，曰く「何が社会問題かは客観的には決められない」。こうした「客観性」に対する厳しい規準は，自然科学をモデルにして作られています。しかし，自然科学の対象把握でも厳密に考えたら，完全に恣意が排除されているかどうかは疑わしいと思います。天動説が地動説に取って代わられ，ニュートン力学がアインシュタインの相対性理論で書き換えられたりなどといった難解な例を出さなくても，青い目の科学者と黒い目の科学者には，観察対象の明度は異なって見えているはずだということを考えれば，自然科学においては完全な恣意の排除がなされているという見解も疑わしいものになってくることは容易に理解されるでしょう。

翻って，社会学の対象はそんなに異なるものとして人々に認識されているのでしょうか？確かに自然現象よりは偏差が大きいでしょうが，多くの社会現象に関して大多数の人々はほぼ同じ認識を持ちえているはずです。でなければ，人々は相互作用ができなくなり，ひいては社会生活を送ることができなくなります。このように大多数の人々によって同じように認識されているものを把握することを，社会学では「客観的把握」と呼んできたのです。もちろん個々の人々にとって認識は主観的なものとしてしか存在しませんので，この「客観的認識」とは厳密に言えば，「大多数の人々によって共有された主観的認識」ということになるのですが。いずれにしろ，社会学において「客観的認識」は不可能だと考える必要はないと思います。社会学者に必要なことは，多くの人々が曖昧な形で主観的に認識しているものをわかりやすい形で示すことだと思います。よく社会学的知見が披露された時，「そんなことは知っていたことばかりだ」と言われることがありますが，別に

そう言われることを恥じる必要はないのです。なんとなく知っているという状態と明確な形で表現された状態は，おおいに異なるのです。社会現象に関して「大多数の人々によって共有された主観的認識」を明確にすることは，社会学の重要な仕事です。

こうした形での社会学的客観認識が理論的に可能だとしても，難しいのは，認識と評価が混同しやすい点です。「今，こういう状態になっている」という認識（ここにも価値観は入ってきますが）と，「社会にとって，それはプラス（or マイナス）だ」という評価が一緒くたになりやすいのです。そもそも言葉――特に形容を示す言葉――自体が評価を含んでいることが多いので，どの言葉を使って認識を表現するかで，すでに評価が入り込んでしまいます。例えば，「今時の若い者は，享楽的な生活を送っている」と表現するのと，「現代の若者は，日々の生活を楽しんでいる」と表現するのとでは，全く印象が異なります。しかし，認識を表現するために言葉を使わないわけにはいきません。なるべく評価の入り込まない言葉のみを使うことにすると，かなり無味乾燥な官僚的な表現になり，読みづらい文章ができあがることでしょう。私は個人的には，あまり窮屈な形で認識を表現するよりも，認識主体の価値判断が入り込んでしまうとしても，その人が一番適切だと思った言葉で表現すればいいのではないかと思っています。表現されたものを読む方が，必要に応じて言葉にまとわりつく評価を剥ぎ取って行くしかないのではないかと思っています。

第4章　連字符社会学の発展と社会学の危機

社会学には，連字符社会学と呼ばれる様々な研究分野があります。連字符とはハイフンのことで，要するに家族社会学とか都市社会学とか教育社会学とか環境社会学とか，社会学の前に○○とハイフンで結びつけられる言葉が付くような社会学のことです。社会学の領域は幅が広すぎるので，ほとんどの社会学者は，いずれかの連字符社会学を専門にしてます。最近しばしば思うのは，現代の社会学は連字符社会学の発展によって細分化されすぎてしまい，危機的状態に陥ってはいないだろうかということです。

そんなことを言ったって，この情報の氾濫する社会の中で，個別分野に絞っても読まなければならない本や資料は無尽蔵にあり，「良い研究者」たらんとすれば，より狭くより深く入り込んで行かなければならないことは事実です。しかし，仕方のないことなのかもしれませんが，連字符社会学の世界にどっぷり浸かってしまうと，他の連字符社会学をや

っている人との間でコミュニケーションができなくなるという不幸な事態が生まれやすくなります。同じ社会学をやっているはずなのに，互いが使う専門用語がわからないなどということがしょっちゅう起こります。専門用語はそれを自由に駆使できるようになると，何かその連字符分野の一人前の研究者になったような錯覚を起こす効果を持つため，研究者――特に若い人――は，一所懸命修得しようとします。そして，こうした専門用語を理解できない人間を見て，「こんな用語も知らないの？まともに話をするに値しないな」という顔をします。しかし，これはおかしくないでしょうか。わかりにくいことをわかりやすく説明するのが，学者・研究者の役割なのではないでしょうか。少数の仲間内だけで理解される用語で語り自己満足しているなら，仲間内だけで通用する言葉を使って遊んでいる高校生とやっていることは変わりません。他の連字符分野の社会学者はもちろん，社会学に興味を持ち，本を読んでみよう，話を聞いてみようという気持ちのある人々にはわかる程度の言葉で社会学は語られなければならないと思います。

こうしたコミュニケーション不能状況は，異なる連字符分野間で生じているだけでなく，各連字符分野内部でも依って立つ理論的立場が異なれば生じてしまいます。全くおかしな話です。このままでは，社会学は，連字符社会学ごとの，あるいはその中でもパースペクティブを同じくする仲間内だけの「タコツボ」に安住する危機的状態に陥ってしまうかもしれません。かつてコントをはじめとする第一世代の社会学者たちが目指したような，一人の社会学者がすべての分野に精通する「総合社会学」を構築することは，現在では当然不可能ですが，志向性としては，分野――社会学の分野だけでなく，他の社会科学の分野も含む――横断的に発想していく「総合社会学」的なものがもっと求められてもいいように思います。もちろん，すべての社会学者がそれを目指さなくてもいいとは思いますが，少なくともそうした志向性をもった人がいなくならないように，社会学のあり方に警告を発し続けることは必要でしょう。そんな大それた社会学はできないと言う人も，社会学として研究する限りは，自分が選んだテーマについては，特定の連字符社会学の枠をはみ出してでも総合的に考察していくというスタンスを取るべきだと思います。

第5章　全体社会の範囲

社会学はマクロな視野を持たなければなりませんが，その際に視野の範囲となるマクロな社会（全体社会）は，どの範域に設定したらよいのかという問題が生じます。全体社会

とは，理念的にはその社会に所属する人々の生活がほぼその中で自己充足できる社会と考えることできます。交通手段の発達していなかった前近代は地域社会が，近代になってからは国民国家社会が，そして交通手段ばかりでなく情報網も発達した今日では世界社会が全体社会の範囲として考えられるというのが，ひとつのオーソドックスな見方ではないかと思います。

しかし少し考えてみればすぐわかることですが，近代社会はもちろん前近代社会においても，地域社会どころか現代の国民国家社会の枠を大きく超えた範域での重要な人と物と文化の交流がありました。「シルクロード」や「海の道」の存在ばかりでなく，広範な地域に伝わる神話の同型性，人種的類似性などが，人類の誕生以来の人と物と文化の交流をよく示していると言えます。その意味では，いつの時代でも全体社会の範囲は，世界全体でなければならなかったということになるでしょう。にもかかわらず，つい最近まで，世界社会を全体社会として捉え，その社会構造や社会変動を語ろうとする社会学が生まれなかった——さらに言えば現在でもまだうまく展開できていない——のはなぜなのでしょうか？

世界社会を全体社会と捉えた社会学を展開する上で最大のネックとなっているのは，各社会ごとに異なる言語の多様性だと思います。言語はもっとも重要なコミュニケーション手段であって，言語が異なる人々の間では，単純な相互作用は行いえても，永続的な集団を形成することは困難です。つまり，言語が異なる人々は，同じ社会に属しているという実感を十分に持ち得ないのです。さらに，様々なパターン化された様式（＝制度）は，基本的には言語を使って表現されるので，共有された言語を持ち得ない範域では制度も共有されにくいことになります。言語の共有がすべてではないと思いますが，社会の範域を決める非常に重要な要素であることは間違いないでしょう。その意味で，原則的にひとつの言語を公式の共通語として定めている国民国家社会が社会学の誕生以来，全体社会として措定されて現在まできたのは当然のことだったと言えるでしょう。

しかし，言語を共有しているのに複数の国家に分かれているケースもあります。こうした場合は言語による範域か，あるいは国家としての地理的範域か，いずれを全体社会の範域と考えたらよいのでしょうか？結論から言ってしまえば，やはり国民国家社会の範域で全体社会を捉えておくのが良いでしょう。ある範域に全体社会としての統合を与えているのは，法政治制度です。ある法政治制度が拘束および保護しうる人々によって，ひとつの全体社会が形成されているのです。こうした拘束的な法政治制度の共有がなければ，たとえ言語が共通していてもひとつの全体社会と考えることはできないでしょう。(ex.アメリ

カとイギリス，ドイツとオーストリア）ひとつの国民国家社会の中に複数の使用言語がある場合に，その国民国家社会がひとつの全体社会と見なせるかどうかという問いも，この拘束的な法政治制度の共有性を基準にすれば容易に答えが出ます。

このような論理展開からすると，「国民国家社会＝全体社会」ですべてすっきりすると思われてしまうかもしれませんが，実際はそんなに単純ではありません。そもそも「国民国家」というのが実に曖昧な概念で，実際の歴史上でもその線引きは幾度となく変更されてきました。それゆえ，国民国家社会を絶対的な全体社会の範域として措定することにはかなり問題があります。ＥＵ（ヨーロッパ連合）というのは，ある意味ではそうした狭く変わりやすい国民国家の境界を有名無実なものとして，より大きく安定的な全体社会を作ろうとする試みと見ることもできるように思います。確かにキリスト教文化圏として考えるなら，全ヨーロッパでひとつの全体社会が構成されていると考えるのは，素直な発想と言えるでしょう。また，経済や環境に関してはまさに世界社会という範域で考えなければ有効な手だては打てなくなっているという事実もあります。今後，世界社会――あるいは国際社会――という視野がますます必要になってくることは間違いないと思います。

一般論として全体社会をどの範域に措定すべきかと問われれば，やはりまだ国民国家社会の範域でと答えざるをえませんが，「国民国家社会＝全体社会」という発想で，現在の社会学の様々なテーマに十分答えうるかと言えば，これまた「否」と答えざるをえません。結局テーマごとに全体社会の範域は定めるしかないのだろうと思います。

第６章　社会学の研究対象とその発見

社会学はどんなものでも対象にしうるおもしろい学問だというのは私の持論ですが，たまにそれはおもしろいかもしれないけれど，社会学になっていないんじゃないのと突っ込みを入れたくなる研究に出会います。かつてＮＨＫの「面白学問人生」という番組で，ある社会学者が「食パンの食べ方を研究している」と得々と語っておられましたが，正直言って私にはその面白さがわかりませんでした。もう少し正確に言えば，社会学的にみてどこがおもしろいのかわからなかったのです。もちろん，サンドイッチにするとか，トーストにする，あるいは焼かずに食べるという話であれば理解できるのですが，その人の研究は，角から少しずつ食べるか，１辺の真ん中から食べるか，はたまた４隅を先に囓るかといった食べ方の研究でしたので，とうてい私にはおもしろいと思えませんでした。確かに

人によって多少食パンの食べ方に癖はあるかもしれませんが，その癖が社会的に形成されてきたとは私には考えがたいのです。どんな現象を取り上げてもいいですが，その現象がどのように社会的に形成されてきたか，またどのような社会的影響を与えているのかという視点なしには，社会学的研究はできません。逆に言えば，そうした視点さえ持ち得れば，どんなものでも対象にしうるのです。たとえば，食パンの食べ方ではだめですが，「食嗜好」や「食様式」であれば，家族や地域をはじめとする所属集団の影響を強く受けているので十分おもしろい社会学的研究テーマになると思います。また，天体の運行は社会的な原因によって影響されていませんが，重要な社会的結果は持っているので，社会学的研究テーマにしようと思えばできると思います。

このように社会学の研究対象は広くいろいろな研究が可能なのですが，意外なことに自分なりの研究対象を見いだすことは実際にはなかなか難しいようです。私のゼミでは，研究対象を見いだすことから社会学の研究は始まるという姿勢でやっていますが，毎年卒業研究のテーマが決められず悩む学生が続出します。どうしたら社会学的研究対象を見いだせるのでしょうか。まず第1に，今自分の生きている社会で何が起こっているかをしっかり見てほしいと思います。新聞やテレビのニュースに関心を持つのが一番いいのですが，そういうものは堅苦しくて苦手だという人は，ワイドショーでも週刊誌でもいいと思います。堅苦しく書いてあるものだけが時代を語っているわけではありません。ただし，どのような情報であっても，それを受容するときには感性を研ぎ澄ましておいて下さい。現代のような情報化社会では，大量の情報がわれわれの周りに遍在しますので，感性を研ぎ澄まし，「あれ，これはなんか変じゃないか」とか「これはおもしろうそうだ」と意識しなければ，すべて何の意味も持たないものとして通り過ぎて行ってしまいます。たとえば，新聞の大きな見出し文字ですら，関心を持たなければ，まったく目に入らないという経験は誰しも持っていることと思います。

感性の鋭い人はこうしたやり方で，社会学的な興味深い対象を発見できるでしょうが，感性の研ぎ澄まし方がよくわからないという人には，「常識を疑ってかかる」という思考トレーニングを勧めたいと思います。人は誰でも，ある物事を常識だ，当たり前だと思ってしまった瞬間に，それについて考えることをやめてしまいます。当たり前のことなのだから，それ以上考えることも説明することも必要ないと思ってしまうわけです。しかし，今ここで自分にとって常識と思えることが，異なる時代，異なる場所，異なる立場でもいつでも常識として通用するかという発想を持ってみて下さい，まずほとんどの常識が常識

ではなくなってしまうはずです。常識が常識として通用するするためには，それなりの社会的背景が必要なのです。常識を共有できる時代，社会，人々が存在するとしたら，そこにはどのような共通点があるのか，共有できない時代，社会，人々との間の違いは何なのかということを考えていけば，自ずと社会学的考察に入っていくことになります。日常生活において無意識のうちに絶対化している「いま，ここ，わたし」を相対化する思考を意識的に行えば，必ず社会学的研究対象は見つかると思います。

第7章　社会学的想像力の必要性

一昨年以来，漫画家小林よしのり氏の『戦争論』をめぐって，様々な議論が戦わされてきました。私も非常に興味を持ったので，学生たちとともにこの本を読んでみました。マンガの持つ特有のイメージ操作などに問題はありますが，戦後社会において「常識」となっていた考え方をくつがえした主張をするこの本は，様々なことを考えさせるいいきっかけになると思いました。特に，この本の本来のテーマは，「個と公」の問題をどう考えるかということですので，社会学を学ぶものにとっては一読に値する本と言えるでしょう。

学生たちに書いてもらったレポートの中に，こんな文章がありました。「国のためには死ねない。……これは個人主義ではなく，自分にとっての損得勘定をしてみると，国に何かをしてもらったと感じたことがない。だから，守っても仕方がない。」本当にそうでしょうか。「国＝国家」と考えると，自民党の政治家や○○総理大臣の顔でも思い浮かんで，彼らに何かをしてもらったわけではないと考えてこう書いたのでしょうが，国は社会でもあります。（小林よしのり氏は，時々混用していますが，基本的には「国家としての国」ではなく，「社会としての国」という側面を強調していると思います。）我々が安全に豊かに便利に暮らせるのは，自分と自分の家族だけのおかげなのでしょうか。そうではないでしょう。この日本という社会が長い時間をかけて作り上げてきた様々な価値観や制度――ひっくるめて言えば「社会システム」――のおかげではないでしょうか。（近年，この日本社会を支えてきた社会システムが急速に崩れつつあり，「安全で豊かで便利な生活」を容易には享受できなくなりつつあります。）そうした社会の仕組みを想像することができないという人はこのレポートを書いた彼ばかりではないでしょう。いや，むしろそんな想像はできないという人が圧倒的多数でしょう。中国の故事に同じような話があったことを覚えています。殷より前の伝説的な王の時代の話だったと思いますが，ある時王が身分を

隠して民の生活を視察に行くと，民の一人が相手が王とは知らず，「われわれは豊かに平和に暮らしているが，これは誰のおかげでもない。もちろん王のおかげなんかではない。王なんて知らない」と豪語します。それを聞いた王は，その場を離れてから「これでいいのだ。本当の統治とは，このように統治されていることに民が気づかないような統治の仕方なのだ」と言ったという故事です。この例をあてはめると，日本の若者が「俺は国に何もしてもらったことはない」と豪語できるということは，まだ日本のシステムは機能しているということでしょう。しかし，最近の様々な事件を見ながら，このシステムが急速な崩壊に向かっていることを感じるのは私だけではないでしょう。このままでは，本当に危険だと思います。うまく行っている――よりよくなっているか，あるいはせめて現状維持――なら，幸せな無知な民のままにしておいてもいいかもしれませんが，日本の社会システムは悪くなっていますので，もうそんなのんびりした気持ちではいけないと思います。日頃あまり実感できない社会システムが，我々個々人の生活を支えていることに思いを至らしめ，おかしくなりそうになっているところは，修復するようにしなければいけません。そのためには，「社会学的想像力」が必要です。個人の行為は社会に規定され，また社会に影響も与えるのだということを想像できる力が，社会学を学ぶ者だけではなく，社会を生きる者に必要です。

そんなことを言われても，日本社会なんて大きすぎてそんな想像はできないというなら，小さな社会から出発してみたらいいと思います。例えば，20人ぐらいの集団を考えてみて下さい。その集団で何かをしようという時，誰か世話役が要ります。小さな集団でもみんなのスケジュールを調整して計画を作るのはそれなりに面倒です。自分以外の誰かがやってくれたら，それに越したことはありません。でも，いつもいつも誰か他の人間に頼っていたら，その人は集団のなかで「フリーライダー」（ただ乗りをする人）と位置づけられ，集団で居場所を失っていくことでしょう。そうならないためには，自分も適度に世話役を買って出て苦労を共有しないといけません。そして，世話役をしているときに頑張れば，それなりに自分の努力の結果が具体的な形で見え，充実感も得られるでしょう。このように小集団であれば，「（非）貢献の結果が見えやすい」（社会学的想像が容易な）ので，個人の行為と集団という小さい社会との関係は明確に見えるでしょう。実は日本社会と個人の関係もこれと同質な関係なのです。ただ，スケールが全く異なるので，（非）貢献の結果が見えにくく（社会学的想像が困難に）なり，結果として貢献しないで済ましてしまう者が多数出ることになります。しかし，もしも日本社会を構成するすべての人が，社会学

的想像力を働かせず，個人的に勝手気ままに行動をするなら，社会は悲惨なことになります。「自分の1票など何の影響力も持ちはしない」と99%の人が投票に行かなくなったら，どうなるでしょうか。「自分は社会の恩恵など感じたこともないから，この社会がどうなろうと構いはしない」などと言い出すのでしょうか。それは絶対に間違っています。社会学的想像力を働かせれば，勝手にやっていると思っていた行為が社会のルールに水路づけられ，また次の時代の社会のルールを作っていくのだと言うことに気づくはずです。もっと社会学的想像力を世間に普及させなければならないと心から思っています。

第8章　社会はどのように成立したのか——歴史的考察——

個人と社会の関係を考察する難しさは，現時点において存在する社会制度を個人行為から説明できないことがひとつの大きな理由でしょう。どんな社会制度も人間によって作られたことは間違いないはずなのに，現時点で社会制度を考えようとすると，デュルケームが指摘したように，どうしても社会制度は個人にとって外在的で制約的なものという位置づけをせざるをえません。この行き詰まり状態から脱却するためには，人間が社会というものをどのように成立させたかを歴史的に考察してみる必要があると思い至りました。データ的には十分ではありませんが，もっとも選択されやすい目的合理的行為を大多数の人間は行ってきたものと考えて類推してみたいと思います。

人間は雌雄別体の生物です。雌雄別体の生物は種族維持の本能から別性との性的交渉を持ちます。雌の妊娠期間は長くその間体力的な無理はききません。また，新生児は自力では生きられません。それゆえ，雌と新生児を庇護する存在が必要となります。妊娠も授乳もしない雄が，雌と新生児を庇護する存在になったのは自然だったでしょう。おそらく初期の頃には「近親相姦のタブー」も不明確なまま，性的交渉が行われ，新しい世代が生み出されていたと考えられます。（ただし，育てた子とその親との間での性的交渉はほとんどなかっただろうと思います。）妊娠させた雄が自分の遺伝子を存続させるために，妊娠した雌を庇護する本能はあったと思いますが，一夫一婦制という形ではなく，血縁関係と性的交渉関係とが不分明に絡み合った集団全体で庇護している状態であったと考えます。

雌の妊娠・授乳期間の肉体的ハンディキャップが，雄による支配と性別役割分業を集団の中で必然的に生み出したのでしょう。雄はより多く自分の遺伝子を残すために，特定の雌だけではなく，複数の雌と性的交渉を持つように本能づけられています。すべての雄が

この本能のままに行動すると，そこには雌をめぐっての絶え間ない争いが続くことになりますが，現実にはそうはならなかったと考えられます。なぜなら，人間には，種族維持の本能ばかりではなく，危険を回避しようとする個体維持の本能も備わっているからです。また，生活環境は決して楽なものではなく，狩猟で大きな獲物を仕留めるには，複数の人間――特に筋力・敏捷性において雌よりも相対的に優れた雄――の協力が必要ですから，雌をめぐっての争いをし続け，集団全体が生存の危機に陥ることは避けられたと考えられます。大脳（思考）の発達がこうしたコスト・ベネフィット計算を容易にさせたことと思います。ここに，１匹の雄は，限定された数の特定の雌とのみ性的交渉を行うという習慣が誕生してきました。特に，１匹の雄と１匹の雌という一対の組み合わせを基本にすると，あぶれるもの――性的交渉の相手を得られないもの――が減り，集団内部での摩擦は大きく軽減されることが経験的に知られるようになり，一夫一婦制が普及するようになったと推測されます。性的交渉関係が整理されることにより，血縁関係と性的交渉関係が切り離され，血縁関係で作られた集団同士が性的交渉によって結びつき，より大きな集団になるという形ができあがったのでしょう。

この頃の食料確保は，狩猟・採集によるものなので，目の良い者，耳の良い者，足の速い者，手先が器用な者，投げるのがうまい者，記憶力が良い者などがそれぞれに合った役割を演じていたはずです。大きな獲物（食料）を確保できる狩猟活動をするに際しての総合力が優れた者が集団の指導者となっていたと考えられます。総合力は，身体能力だけでなく，いやそれ以上に経験的知識の豊富さが重要な役割を果たします。それゆえ，それなりの年齢の雄がリーダーになっていたと考えられるのが自然でしょう。集団を律するルールも慣習に基づくのが基本であるため，過去のことをよく知っている者が集団のリーダーとしてもっとも適任だといういうことになります（長老支配の誕生）。

百万年以上の時間をかけ，先行世代から後続世代に知識・経験が伝達される中で，不安定な狩猟・採集生活から，安定的な農耕・畜産生活を可能にする知識も蓄えられ，漂流生活から定住生活への変化が起きました。狩猟・採集生活時代とは異なり，生存に必要な量以上の余剰資源を常時所有することが可能になり，所有に関するルールが必要とされるようになってきました（私有財産制の誕生）。こうした保有資源量の差が貧富の差となって現れ，豊かな者が集団の中心になる体制が確立します。自分自身が身体的能力に優れていなくても，余剰資源を活用することで，身体的能力に優れた者に自分を守らせることができるようになるからです。

集団の中心になったものは，その地位を維持し，集団を運営するために，自らの正統性と規範（ルール）と物理的力を必要とします。自らの正統性としては，特別な能力の持ち主だと主張し，自然現象に関する予知能力があるなどと思わせることがもっとも人々をひきつけやすかったと考えられます。それを権威づけるために人間を超えた存在とのコミュニケーションが可能だと思わせたのです（神と宗教の誕生）。しかし，予知能力などは実際には経験と知識に基づいたものにすぎないので，それほど人々をいつまでも感心させておくことはできません。それゆえ，そうしたカリスマ的能力よりも，現実的な争いを解決する調停能力を示すことの方が体制を維持する上でより効果的だということに気づきます。調停を毎回毎回ケースごとに行うのは，非常に煩雑で，基準も狂う――結果的に調停能力に対する信頼を失う――可能性があるので，法を作る必要が出てきます。集団も小さく単純な構造ならば，口頭で伝えられてきた慣習法で済みますが，集団が大きく構造も複雑になってくると，どうしても文書化された法が必要になってきます（成文法の誕生）。しかし，どんなに正統性と規範を整えても，それに従わない人間は必ずいます。そのため，そうした人間を物理的に抑える力が必要となり，集団の指導者は，武力を行使する人間たちの組織を作り，それをコントロールするようになります（軍隊の誕生）。こうした正統性と規範と物理的力が整った時，古代国家社会が成立したと言えるでしょう。この時点で，社会の基本形態はできあがったと考えることができるでしょう。

第9章　実感主義とミクロ社会学

自分と自分にとって身近な人との関係性にしか興味がなくなっていく時代の中で，社会学の研究にもそうした趨勢を反映した傾向性が強まっているという気がしてなりません。1960年代にパーソンズの構造―機能主義が批判され，メイン・ストリームを失った社会学は，70年代以降，「多元的パラダイムの時代」に入ったと言われています。そうした状況の中で，相対的に人気を増してきたのが，ミクロ社会学です。理論的には，「意味学派」とも総称される行為や相互作用の意味解釈を重視する立場であり，実証的には，身の丈の生活実感で捉えられる「実感主義」を重視する立場です。1970年代に『思想の科学』あたりでよく使われていた言葉を使えば，「鳥瞰的視野から虫瞰的視野への転換」ということになるでしょう。

確かに，マルクス主義をはじめとするマクロ社会に関する言説が，現実社会の分析とし

てはずれてしまっていたにも関わらず無用に幅を聞かせていた時代には，こうした身の丈の研究を進めることに大きな意義があったことは確かでしょう。しかし，それから四半世紀以上経った2000年という現在においては，もはや「虫瞰的ミクロ実感主義」はプラス面よりマイナスの面の方がはるかに大きくなってしまったと思います。特に，社会学という本質的にマクロな問題を考えなければならない学問にとって，「ミクロ実感主義」に多くの研究者が流れていくことは，社会学という学問の将来にとっては，非常に危険な傾向と言えます。（いや，単に社会学という学問のためだけでなく，現在の行き過ぎた個人主義が跋扈する社会状況をさらに悪化させることにもなりかねないと思っています。）

社会学が何らかの実践に役立つ学問になることがあるとしたら，それは身の丈レベルのアドバイスをすることによってではなく——そうした仕事は，臨床心理士やケースワーカー，ソーシャル・ワーカーといった人々に任せた方がいいでしょう——，表面的には見えにくい複雑な社会システムの連関を明示することによってでなければならないはずです。普通に生きている人たちが考えもしないマクロな社会との連関を示すことによって，大きな根本的な問題点の指摘と対策が提示できるのです。それが，社会学がなすべき本来の仕事です。ところが，「ミクロ実感主義」が広まる中で，こうした大きな発想を持とうという研究者が育たなくなってきているように思います。

確かに実感を把握できるのは，楽しいことです。それこそ，研究しているという「実感」を持つことができ，充実感を味わえます。たとえば，「地球温暖化問題」と「ゴミ問題」なら，後者の方が実感で把握できることが多く，調べている，研究しているという「実感」を間違いなくより強く持てるでしょう。私も，研究者になるつもりのない学生の卒業研究などでは，こうした実感を把握しやすい研究を勧めます。しかし，社会学という学問を担っていかなければならない研究者なら，話は別です。安易な「ミクロ実感主義」にいつまでも止まり続けてはならないと思います。最初は，「ミクロ実感主義」からスタートしても構わないと思いますが，社会学という学問が何をしなければならないのかということを真剣に考えていけば，「ミクロ実感主義」のままではいけないということに気づくはずです。

「実感主義」のもうひとつの問題点は，実感を感じられないようなことは研究してはいけないという主張が，まかり通るようになることです。たとえば，昔学会で実際に聞いた発言ですが，有名な女性研究者が，今は著名となった男性フェミニズム研究者に「男の研究者には，フェミニズムは研究できない」といった主張したことがあります。もちろん，理由は「女の実感」が捉えられないからです。聞きながら，「おやおや」と思っていまし

た。その轍で言ったら，高齢者の問題を語るためには，高齢者になるまで待つしかないし，犯罪社会学をやるためには，犯罪を犯さなければならないことになり，自殺の研究をしようと思ったら，自殺してみなければならないというパラドックスに陥ります。こんな主張が，ナンセンスなのは容易にわかってもらえるでしょう。実感を把握できればそれに越したことはないですが，実感だけ把握できても，社会学はできないということを強調しておきたいと思います。

第10章　社会学的価値相対主義の潜在的逆機能

1980年代以降ポストモダン言説が普及し，近代社会が社会構成の前提としてきた価値観の自明性が疑われるようになってから，社会学でも徹底した価値相対主義にはまりこんでしまっています。いや，そんな被害者のようなポジションに社会学を位置づけるのは正当ではないでしょう。むしろ最近の社会学は，率先して近代の価値観の自明性を壊してきたと言った方がいいように思います。私も多様な価値観が存在することを認めるのにやぶさかではありませんが，単純にすべての価値観を並列に並べるのではなく，メジャーな価値観とマイナーな価値観とをきちんと区別して語るべきではないかと考えています。そうしないと，社会をいたずらに混乱させることになると思うからです。大多数の人々が自然に身につける価値観と，極少数の人々のみが持ちうる価値観とを同列に並べて知識人と称する人々が論じて続けていると，大多数の人々は生き方の指針を失い，生きづらくなるだけだと思います。たとえば，「男らしさ」も「女らしさ」も否定し，「自分らしく生きよう」と社会学者に語りかけられ，そうしなければと思い込んだ多くの人々は「自分らしい生き方」を見いだせずに，不安な毎日を送ることになります。

社会学者を名乗り，マイナーな事例を出して，メジャーなあり方を批判している人は，自分の出している例がマイナーな例だということをちゃんとわかって言っているのだろうかと疑問を持つことがしばしばあります。いくつか例をあげてみましょう。①女性が狩猟をし，男性が家事・育児をする部族があるから，性別役割分業など全く自然なものではない。②染色体の組み合わせが通常の男性や女性とは違う人がいるから，同性愛や性同一性障害もしばしば生じるのも無理はないし，人間を男か女かという2分法では分けられない。③援助交際をしている女子高生の中には，親や学校や社会に対する異議申し立てとして行っている人もいるので，援助交際も一概に否定できない。

確かにこうした例外的な事例はあるのでしょう。しかし，大多数の社会は性別役割分業を採用してきましたし，大多数の人々は生物学的に見て男か女に分けられるし，異性を愛することを自然なこととして受け止めています。援助交際をする大多数の少女たちは遊ぶお金欲しさにそうした行為を行っているはずです。マイナーな例を持ち出して，メジャーなあり方を批判する場合，その言説がどういう効果を持つかについて，熟考してから行ってほしいものだと思います。

もちろん，自明と思われてきた近代の価値観の中にも，行きすぎた不当なものがあったことも事実です。たとえば，性別役割分業の名の下に，女性役割が男性にとって都合がよいように制限されてきたことなどは，批判されてしかるべきでしょう。しかし，だからといって，男と女の肉体的構造の違いを全く無視した「性別役割無分業」や「男らしさ・女らしさ」の全否定にまで行ってしまうのは，飛躍のしすぎでしょう。伝統的な価値観であっても，批判すべきは批判し，継承すべきは継承するという精神で行かなければならないと思います。「すべてか無か」という発想は，建設的ではないと思います。

メジャーとマイナーを同列に並べるのではなく，区別した上でともに生きづらくならないようにすることが大切です。もちろん多数派が正しいと主張したいわけではありません。ただ，多数派が受け入れやすい価値観はこれで，それが受け入れられない人が別の価値観を選択することも認められるようにしましょうという主張をすればいいと思っているだけです。少数派を救うために，不当に多数派を攻撃することは，社会に混乱をもたらすだけです。社会学者は，自分の主張の潜在的機能にもっと敏感になるべきです。

第11章　概念へのこだわり

学者研究者を自称する人と話していて不毛だなと思うのは，無用なまでに概念にこだわった議論をしたがる人と話しているときです。確かに，概念はいい加減に扱ってはいけないと思います。しかし，だからと言って，厳密な定義にこだわりすぎていては，概念構築の罠から抜け出せなくなります。学者研究者は基本的に言葉を使ってしか，自分の考えを表すことはできません。すべての言葉を厳密に定義してからでないと使えないなんて思い始めたら，１歩も前に進めなくなります。もちろん，新語・造語の類を使うなら，きちんと定義してからすべきでしょう。しかし，何十年も使われ，一般社会でもあまり大きな偏差なく受け入れられているような概念に，相変わらずこだわりすぎるのは，百害あって一

利なしです。

最近私が困惑させられたケースをあげると，ひとつは「アイデンティティ」という概念をめぐっての議論です。私がこの概念をどのような意味で使ったかと言えば，たとえば，自分は日本人であるとか，大学教師であるといった「自分が何者であるかという自覚的意識」程度の意味で使っていたのですが，何か納得してもらえないようでした。でも，この「アイデンティティ」という概念は，すでに一般社会でもこういう意味で使われていると思うのですが，私の認識が間違っているでしょうか。もうひとつ困惑したのが，「生活者の視点」という時の「生活」と「生活環境主義」の「生活」は異なるという一部の環境社会学者にしかわからない――いや，言っている人以外はほとんど誰にもわからない――議論です。こういう議論をすることにあまり意味があるとは私には思えません。

社会学はあまりに概念を造りすぎてきました。もうこれ以上あまり増やす必要はないでしょう。変化してしまった現実を記述する上でどうしても必要な概念なら，造ることに反対しませんが，理論的概念などはもう十分すぎるほどあります。これ以上はどう考えても不要でしょう。私はできる限り，定着した日常用語を使って社会学を語るべきだと考えています。語りかけるべき相手は，仲間の学者研究者ではなく，社会学に興味をもってくれるすべての人たちであるべきです。専門用語を濫用していては，一般の人たちには社会学の魅力は伝わらず，ひいては社会学を研究する価値も失われます。人によって意味の受け止め方がまったく異なるような曖昧すぎる日常用語は，使うのを避けるか，定義し直す必要があるでしょうが，大多数の用語に関してはそこに含まれている意味を多くの人々は一応ほぼ共有化しているはずです。でなければ，日常生活におけるコミュニケーションが不可能になってしまいます。たとえば，ここまでこの章を読んできて，辞書を引かないとわからないなと思われたのは，「生活環境主義」ぐらいでしょう。他の言葉に関しては，ほぼ意味は共有化されていたはずです。

社会学の専門用語が必要とされるのは，一般化した抽象的議論を展開しようとする時でしょう。確かに多様な現実を整理して見せるために，あるいは社会の仕組みを理論的に説明するために，専門用語は必要です。しかし，その際に，自分で新しい概念を造りだすのではなく，なるべく長く使われて定着した概念を使うようにすべきです。研究者が微妙な違いを強調して次々に新概念を造りだしていたら，過去の蓄積が継承されず，混乱するばかりです。1980年代以降の社会学の状況というのが，まさにそれではないかと思います。余程の新しい発想がない限り，無理に新しい概念を造りださなくても，過去の用語を使っ

て説明できるはずです。たとえば，ここ10数年の間でもっともよく使われてきたブルデューの「ハビトゥス」という概念も，社会化によって内面化される集団の価値観や行動様式と言い換えても何の問題もないという気がして仕方がありません。

言葉は造られると，一人で走り出し，時として現実が言葉に合わせて変容したりします。また，言葉に威光のようなものまでついてしまうと，その言葉をわかりやすく説明しようという気持ちが研究者になくなり，その言葉を知らない人たちには，話がまったくわからないものになってしまいます。私は，自分ではもうあまり社会学の専門用語を造ろうとは思いません。むしろ，一般の人にわからないものになってしまっている現在の社会学の専門用語をわかる言葉に翻訳して伝えることが大事な仕事だろうと考えています。

付記：この章で使っている「概念」と「用語」と「言葉」はほとんど同義です。科学的に厳密に書くなら，１語に統一した方がいいのですが，堅苦しく読みづらい文章になりそうなので，文章の流れがスムーズになるような言葉（用語？概念？）を選んでいます。また，概念（用語？言葉？）にこだわる人は，「一般の人」とはどういう人を指しているのか，あるいは「学者」と「研究者」はどう違うのかと尋ねてくるかもしれません。本文中にも書きましたが，「一般の人」とはここでは，社会学に興味をもって本を読んでみよう，話を聞いてみようという人たちすべてということになるでしょう。また，「学者」と「研究者」はほとんど同義です。このように，概念（用語？言葉？）をいちいち説明しなければいけなくなると，いかにうるさい文章になるか，わかっていただけるでしょう。

第12章　学問研究は何のためにするのだろう？

大学勤めの研究者はよくこう言います。「大学の事務的仕事や授業担当時間が増えると，研究時間が奪われることになるので困る！」確かにそうです。私もしばしば気心の知れた友人とは自嘲気味に「僕らは本当によく使われるよね。これじゃ，『事務系教員』だよね」などと話しています。「学究肌」（本音で言えば，「事務能力に欠ける研究者」）なんてレッテルを貼ってもらえると，随分事務的な仕事が減るんですが……。教育も熱心にやろうとすれば，それだけ時間を取られます。いくら一所懸命教育しても，その教育された人間が研究者にでもなって活躍してくれない限り，学会というところでは全く評価してくれません。「よい」研究者になるためには，なるべく教育にかける時間も減らして，研究論文を

せっせと書いた方がいいわけです。

でも考えてみると，われわれはなぜそんなに必至になって学問研究をしなければならないのでしょうか？もちろん，大学教員としての地位をまだ得ていない若い研究者は，まずは大学に職を得る――生きていくために必要な収入を得る――ために，研究業績をあげなければいけないでしょう。でも，もう大学に職を得ている研究者の場合は，どうなのでしょうか。中には，確かに大学に職を得たため安穏として研究をほとんどしなくなる人もいなくはないですが，多くの人は，一応一所懸命研究しているように見えます。なぜなのでしょうか。より有名な大学に移るため？学会で有力な地位を得るため？そういう人もいるでしょうが，そんな人ばかりとは思えません。問いかけたら，皆さんもっと美しい理由を言うでしょうね。「学問を究めたいから」とか「純粋な知的好奇心から」なんかが出てきそうな答えですね。要するに，内面からわき上がってくる知的欲求を満たすために，学問研究は行われているというところでしょうか。

私は何のために学問研究をしなければならないと考えているのか，自分自身に問いかけてみました。「知的欲求」はありますが，社会学をすることで知的欲求を満たしたいとはあまり思っていません。私にとって知的欲求は，むしろ社会学以外の本を読んだり，話を聞いたり，ＴＶを見たり，新聞を読んだりすることで満たされています。言うなればそれは趣味です。また，「名誉欲」みたいなものも皆無とは言えないような気がしますが，それほど強いものではないです。そもそも，「知的欲求」にしても「名誉欲」にしても，欲求である限り，それを満たすためには，むしろコストを支払うべきであって，利益を受け取れるはずはないと思います。つまり，学問研究の目的がこうした個人的欲求を満たすことだけであるならば，学問研究をするために，給料をもらっている大学での仕事を減らせという主張は正統性がなくなってしまうような気がしてなりません。こうした理由に正統性がないというならば，いかなる理由で，私は学問研究を続けることができるのでしょうか？

今この問いかけに私が用意している答えは，学問研究を通して人々の幸福度を増すことができるからということです。これは，社会学に関してのみ言えることではなく，学問研究すべてに対して言えることです。いやもしかしたら，人間の仕事全てに対して言えることかもしれません。しかし，とりあえずそこまで話を広げず，学問研究だけで考えておきましょう。なぜ，物づくりをしない学問研究が，社会的に存在を許容されているのか，いやそれどころか厚遇されている――たずさわる人には高い地位とそれなりの給料が与えられている――のかと言えば，やはり学問研究が人間社会の役に立つからでしょう。別に直

接すぐに役に立たなくても構いませんが，少なくとも研究をしている本人は，いつか必ず役に立つはずだという強い思いは持っていなければならないと思います。（たとえ，実際にそうならなかったとしても。）自然科学の基礎研究などでは，かなり後の時代になってからはじめて応用可能になったものなども少なからずあると思います。錬金術なんかもそうしたもののひとつでしょう。研究していた学者たちが期待していた他の物質を金に変えるという目的（顕在的機能）は達成されませんでしたが，潜在的機能として化学を発展させ，次の時代の発展を導くことになったのです。

社会学ももちろん役に立つ学問でなければなりません。社会学の研究が進むことによって，人々の幸福度が増さなければなりません。単なる趣味，おもしろいからではいけないと思います。では，社会学はどのように人々の幸福度を増すことができるのでしょうか。幸福の測り方は人によってかなり異なるでしょう。私は，自分の経験から言って，社会学を学ぶことで，物事が，人間がよく見えるようになると確信しています。そして，よく見えるようになれば，評価や行為選択にミスが減り，生きる上でのコストが小さくなり，楽しく生きられる時間が増すという経験をしてきています。なぜ社会学を学べば，物事や人間がよく見えるようになるのかと言えば，日常生活をしているときには頭に浮かんでこないような社会の連関を考え，人間行動のパターンを分析的に思考するからです。常に大きな社会の枠組みの中で問題を比較分析し，自分の置かれた状況を相対化して見られるようになれば，近視眼的な判断ミスをおかさずに済むのです。

こうした社会学的思考法を広めるために——つまり人々の幸福度を増すために——，今私は社会学という学問研究をしているわけです。自分が研究対象としている地域の問題に，こうした社会学的思考を適用し分析することで理解を深めてもらう，また，自分自身の使えるツールのレベルを上げるために，理論的に社会学を考えるという営為をしつづけることが必要なのです。しかし，もちろんこうした観点に立つ私の学問研究の立場からすれば，自分が直接語りかけることのできる学生たちに対する教育は，一番大切な仕事のひとつです。大学の事務的仕事もそんなにたくさんやりたくはありませんが，学生たちを育てる上で必要な改革を考えるためなら，多少時間を取られることになっても嫌な仕事だとは思いません。そういう仕事から逃げてする「学問研究」が立派なものになるとは，私は思えません。

おわりに

本文を，ホームページ掲載時と同様に「です・ます」調で書いてきた。「である」調に書き直すことも可能だったが，微妙なニュアンスが変わるので，そのままにさせてもらった。かなり内容的に刺激的なことを書いているので，「です・ます」調で書くことで，少しトーンを和らげる効果も狙っている。これで，社会学について思うことをすべて書ききったわけではないので，またいずれ「社会学を考える」の「その２」を書きたいと思っている。

―― 2000.6.29 受稿 ――